

第五節 大震災による新劇人の衝撃と覚醒 その三

―劇団の迫害と受難―

平沢計七への迫害―震災下の思想弾圧―柳瀬正夢の拘束と改心―千田是也と朝鮮人

騒ぎ―演劇への遍歴薄田研二―留置場における激震沢田正二郎―浅草興行街の壊滅―

長田幹彦「楽屋から」

新劇人に係わる多くの震災記録のなかで、とくに悲惨なのは小山内薫の師弟平沢計七の運命である。鉄鋼所の工員であった平沢は、大島・亀戸における労働組合活動家であるとともに、プロレタリア演劇の先駆たる〈労働劇団〉を組織していた。大地震翌々日の夜半、平沢は数名の警官に呼び出され、大島町の自宅より警察署へと連行された。同じ頃亀戸では南葛労働会の活動家六名が検束され、いずれも生死不明となる。十月十日警視庁は亀

戸警察署における彼らの殺害を認め、新聞各紙でも報じられた。①

平沢計七が命を断たれた一連の弾圧は、関東大震災に派生した亀戸事件としていまに伝えられる。まもなく労働総同盟友愛会の依頼により、弁護士山崎今朝弥らの自由法曹団が事件の調査に着手した。犠牲者の家族や周囲の人たちを対象に、かくして作成された聴取書二四件の第一は、平沢の遭難をめぐる知人八島の陳述である。

平沢計七の検束と殺害 『自由法曹団聴取書』

聴 取 書 第 一

府下大島町三丁目二百二三番地

八島京一 二九才

一、自分は一日の地震の日に焼出され小松川の方面に逃げましたが、二日に雨が降り野宿が出来ませんので大島の方へ行きたる処、途中で平沢君の細君に逢いました処、自分の家に来て居れと云われたので平沢君の処へ行きました。此時は午後三時頃でした。而して平沢君は翌日正岡君の処へ倒潰家屋片付の手伝に行き、夕方帰って暫くすると夜警に行くと云い出て行き九時か十時頃と思う頃帰って来ました。暫く休んで居ると

① 藤田富士男・大和田茂著『評伝平沢計七』恒文社、一六八一―一七五頁。

拙稿『紡績工場の労資と女工の被災記録―産業革命先端への震災直撃(続)』三七―四一、九五―九九頁。
online.

正服巡査が五六人来て平沢君に、まことに済まんが警察まで一寸来て呉れと云い、平沢君も「はい」と云いおとなしく出て行きました。

そして夫れ切り帰りませんから細君が心配するし、自分も心配だから五日の正午頃手拭紙等を持ち警察署へ差入に行きました。而して亀戸署の高木高等係に逢い差入れを托したる処、平沢君は三日晩に帰したと云いますから自分はその時平沢君はもう殺されたものと思つて帰つて来ました。

二、その訳は、四日の朝三四人の巡査が荷車に石油と薪を積み引き行くに逢い、その中の一人の顔馴染の某正一と云う巡査にその薪及石油は何にするかとききたる処、外国人が亀戸管内に視察に来るので、その死骸三百二十人を焼くので昨夜は徹夜した、朝鮮人ばかりでなく主義者も八人殺されたと云うて居りました。夫れで平沢君も居るのではないかと、巡査にきいた方面の場所へ行き見たる処、朝鮮人支那人等二、三百人位の人間が殺して山に積でありました。その近辺に平沢君の靴と思わるる靴が置いてありましたからです。

三、私の考では平沢君は自警団へも進で出ており、極めて親切な要領の好人ですから、殊に彼の場合演説をしたり、革命歌を唱えたり、又警察内で騒ぐ様な無謀な行動を採る様な人で無いと深く信じて疑いません。

四、尚私の考えでは平沢君は三日に連れて行かれると、その夜の中に殺されたものと考えられます。
右の通り相違ありません。

大正十二年十月十六日午后十時

東京市芝区新桜田町十九番地 松谷法律事務所ニ於テ

八島宗一

聴取人弁護士 松谷与二郎

立会人 〃 山崎今朝弥 ①

平沢計七の活動については、土方与志や鈴木文治による回想もあるが、山内みななの自叙伝には震災直前の面影が親しく描かれる。紡績女工であった山内は、やがて労働運動に専念し、下中弥三郎設立の労働週報社に勤めた。労働者向けの雑誌で平沢計七を編集長とするものの、ここに属したスタッフは他に彼女ひとりであった。

山内みな 平沢計七さん (『山内みな自伝』)

『労働週報』の編集発行名義人が平沢計七さんに変つたのは、大正十一年の十一月七日発行の第二二号からですが、平沢さんは純粹の労働者出身の労働運動家で、大正初期からの友愛会の中心人物のひとりでした。……

『労働週報』の事務所で仕事をしているときの平沢計七は、いつも陽気で、黙っているということがありませんでした。私を相手に労働歌を歌ったり、自分の書いた小説を暗唱したり、時によつては芝居を始めたりました。私ははじめは、氣違いかと思いました。そうかと思うと「これは売れない雑誌であり、もうからない仕事だ。むだじゃな」と独言を言つたりしました。

小説家の菊池寛が事務所にたずねてきて、「平沢に会いたい」と案内をたのみました。そのようすが、モサツとしていて背が低いので、私は毎朝読んでいた新聞の連載小説を書いている小説家の菊池寛だとは思いませんでした。さぞ美男子だと思っていたから、ピンとこなかったのです。平沢が「ここです。ここです。」と言ってでてきて、芸術論をやりだす。菊池寛が帰ってから私がきくと「おお、あれが有名な菊池寛だよ」と言っていて何かフツフツ言っていました。「何ですか」と私がきくと、「あれはブルジョア階級の小説で労働者階級の小説ではない。面白いだけが小説ではない」ときびしい声で言うのです。私は「わかりました」とこたえましたが、ながながとプロレタリア芸術論を話したのです、そのあとはこっちは聞いていませんでした。次に菊池寛がたずねてきたとき、私が応接間をつかったら、と言ったのですが、「つくろうことはない。労働者は労働者だ」といって、狭い事務所の中で芸術論をやりだすのです。私はふきだしてしまいました。①

前衛的なポスター、装幀、油絵で知られる柳瀬正夢は、田端や本郷でボヘミア的な年月を送りつつ、十五歳で院展に入選した。雑誌『我等』を創刊したばかりの長谷川如是閑と大山郁夫に個展を機縁として知り合い、大正デモクラシーを唱導する両知識人から保護と影響を受ける。同時に村山知義らと新興美術の一派マヴォを組み、『読売新聞』に時事漫画を書き続けた。大正十二年八月大山の静養に付き添って房総海岸に滞在し、一足先に帰

① 『山内みな自伝』新宿書房、一九七五年。一一一―一一三頁。

京した彼は、大山の留守宅で大地震に驚愕。下宿に戻って、深夜検束されるのはその二日後である。綴られた柳瀬の自叙伝は数頁にすぎぬが、なかでは震災における検束と新生への改心が中心的に記述される。①

検束の艱苦と新生への改心（柳瀬正夢「自叙伝」）

彼が自叙伝を書くという。僭越の至りである。だが恐らく彼はこれを最初にして最後のものとするであろう。来順番好機不可逸。この機会にでも彼ひとつ生活過程を整理し、同時に即刻彼のこの過去帳を埋葬せねばならない。ぼやけた彼の記憶よ、やすらかに成仏しろ！

彼の生年？ 大正十二年。 月日は？ 九月一日。

全く真面目で言っているのである。彼はぐうだらでありし過去の襤褸をば、此の日きれいさっぱりと棄てたから。関東大震災の焼土の中に。

そして彼の更生使命は？ 組織的無産階級解放運動。・・・

大正十二年九月一日の関東の大震災は、私の終始した観念的ニヒリズムを根こそぎ持って行ってくれた。何の馬鹿々々しいと思ひ乍らも、此の災変を限界に更生したことが今頃になって意識されてきた。避暑の房州から皆より二日先に帰京して、大山さんの戸塚の邸の留守番をしていたことが禍因となった。

その夜たしか震災三日目であつたと思ふ。十二時過の下宿の二階の夜警から帰って余震に揺れる蠟燭の灯

① 柳瀬信明『柳瀬正夢を語る』『へねじ釘の画家』柳瀬正夢展』ムサシノ出版、一九九〇年。二二―二七頁。

に、漫画日記をつけていた時突然私は襲はれた。後で家宅搜索に取散された部屋一杯の乱雑さと、夜具の上などに残っていた土足の跡などを数えて、私は当夜の物々しさに改めて驚いたが、それは私が街路へ引出されて下宿に背を向け、懐手のまま直立不動を強いられている間に行はれたものとみえる。予審判事達の自動車二台が暗の中に棄ててあるのを見た。私は軍隊の銃剣包囲の中で、中尉に命令された夜空の一方をみつめてみた。やられるものと覚悟していたが、その瞬間の落ちついた英雄的な気持を今辱かしく思っている。私は馬鹿だった。

親しかった近処の人達は私の敵にと一変した。罵言、弓張、日本刀、鳶口、竹槍、石ころ、銃剣、そして暗、里程、護送中の軍隊、その他の乱暴さ愚昧さをいま詳述する自由と暇を持たないが、自警団の名によって表されたおろかな民衆の姿を見た。警察の狂乱。

私は戒厳令下の仮設中隊本部から淀橋署に引渡されて、留置場にたたきこまれた。隣檻に五年振の友達が居たりなどした。格好な其処は私の天国だった。

五日間のうち私は此の安全地帯から放り出され、長谷川さんの忠告に従い一カ月許り門司に帰った。私は彼等の宣伝のあらゆる仮面を見た。じっとしてはいなかった。私は行動を引ずった。①

大山郁夫は当時早稲田大学の政治経済学部で政治学の講義を担当していた。大震災の三カ月前、六月四日に治

① 「自叙伝」『柳瀬正夢全集』三人社、二〇一三年。第一巻、二〇、二七―二八頁。

安当局の検事一団は、佐野・猪俣両講師を搜索するとして、早稲田大学構内に立ち入る。彼らは恩賜館研究室なる大山教授の机上をも点検し、風呂敷包一個と紙包一個の書類等を押収した。これに対して同月二六日神田のキリスト教生年会館で抗議集会が開かれ、三宅雪嶺の講演に続いて大山は、落涙しつつ学問の自由と大学の自治を訴えた。大地震の翌日戸塚の留守宅が搜索され、自邸に戻った彼は九月七日、多数の武装兵士によって憲兵隊臨時駐屯所に連行され監禁される。① 柳瀬正夢の検束と収監はみずから推断するとおり、大山への弾圧に起因したであろう。

大山郁夫に師事し、のちに彼を党首とする労働農民党に参じる田部井健次は、大震災の第七日恩師の消息を心配し、戸塚の大山邸を訪ねた。房総から帰宅した夫妻は無事で、田部井も朝食を共にする。その間に数十人が邸宅を包囲して、政治学者大山を検束し、これに應對する田部井もみずから望んで憲兵隊屯所に監禁された。かねて陸軍では大山郁夫襲撃の計画がなされていた。田部井による小冊子『大山郁夫』には、震災に乗じた思想弾圧の一端が痛切に語られる。

憲兵隊による大山郁夫の拘禁（田部井健次著『大山郁夫』）

私が戸塚の先生のお宅へ着いたのは、朝の九時ころでしたが、内玄関の戸を開けると、直ぐその突き当りのところにある食堂から先生と奥さんのにぎやかな笑い声が聞えて来ました。ははあ、もう帰って居られる

な、と思って私は直ぐに上へあがり、大急ぎで食堂の戸を開けると、先生と奥さんは食事をしておられました。私も直ぐに朝めしを御馳走になることにし、一緒にめしを喰べながら、当時の東京の状況を先生に詳しく報告しました。大杉さんのことは私はまだ何も知って居りませんでした。堺利彦老人を中心とする数名の人々が獄中で殺されたらしい、というようなことや、江東方面でだいぶ多くの同志が殺されたらしいという噂など、私の聞き知って居た限りのことを報告し、最後に私は「先生！我々も東京にいては危いです。も一度田舎へ逃げ出すことにしませんか」ということを提案しました。

と、丁度そのときです。当時大山先生のところへ書生さんをしておったS君があわてふためいて食堂の戸を開け、「大変です！いま兵士たちが剣つき鉄砲を持って玄閣のところへ押し寄せて来ています！」というのです。・・・玄閣のそとにいたのは約二十人ほどでしたが、なお垣根のところにも二間に一人くらいの割合で兵隊が配置されているのがちりと見えしました。多分家の周囲全体をぐるりと取りかこんでいるのです。全部で五十人くらいの兵隊が動員されているらしいのです。・・・

僕は若い将校との談判を終えるや否や、直ちに奥へ取ってかえし、先生にこう言いました。「先生！とうとうやって来ましたよ、憲兵隊本部の命令で先生をつれに來たのです。家の周囲はもう兵隊に取りかこまれてしまいましたから、逃げようとしてもとても不可能です。僕も一緒にいきますが、これが最後になるかも知れませんから、その覚悟で行くことにしましょう」と。・・・

やがて支度が出来たので、今度は先生と僕と二人で玄閣へ出て行きました。そこには例の若い将校が相変わらずいかめしい顔をして控えていました。彼は最初の論争があつてからは、敢えて上へあがろうとせず、じつとそこに待っていたのでした。先生はその若い将校に向かっていかにも静かに、「ごくろう様です」と

いう丁寧な挨拶をなさいました。その将校も黙って目礼し、我々はそのままだとやと玄閣の外へ出ました。先生と僕とを中にして、前方には約二十人くらいの、後方には約三十人くらいの兵隊が、四列縦隊に整列しました。そのとき表の方を見ると、垣根のそとに約百三十人位の人たちが、群がり集って何かがやがたと話し合っています。多分近所の人たちが噂をききつけて集まって來たのだと思います・・・

やがて私たちは約一時間ほど歩いて、落合の憲兵隊屯所へ着きました。そこは普通の住宅を臨時に憲兵隊屯所にあてたものでしたが、相当に広い家で、その家の庭には多数の兵隊があちらこちらに屯していました。その家の八畳ほどの広さの板敷きの応接室でした。時間は十一時少し前だったと思います。私はその部屋へ入れられるや否や、とっさにまどのところ行って外の様子を見ましたが、そのまどの直ぐ下には十数人の兵隊が屯しているの、いざとなつてもそこから逃げ出す可能性は全く無さそうです。・・・

我々ふたりは相変わらず応接室に監禁されたままです。そとはもうすっかり暗くなり、やがて八時近くなのですが、まだ何の音沙汰もありません。「どうするつもりなのだろうか、殺すなり、帰すなり、さっさと片づけたらいいではないか！」と僕は腹の中で少々いらいらしながら考えました。が、やがて四、五人の将校がどやどやと部屋の中へ入って來ました。そしてその中の大將株の男が、「どうもいろいろ御迷惑をかけましたが、もう帰っても宜しいです。御留守中にお宅の家宅搜索をしましたが、どうぞ悪からず」という挨拶をしました。・・・

かくして先生と僕とはその晩の九時近くに無事に家へ帰って來ました。しかし、僕が憲兵隊屯所でかえりがけに「別段用事も無いのに、我々をこんなところにひっぱって來て云々、」と言ったのは、実は全く僕の誤解でした。彼らにはやはり「重大な用事」があつたのでした。後で判つたのですが、彼らは最初から暗殺

の目的で、先生を憲兵隊屯所へひっぱったのだそうです。

あの大地震があつて数年後労働農民党の支部が全国各地に確立され、華々しい闘争を展開し始めた頃のことです。四国の或る町の町長で、極めて熱心に労働党を支持していたひとりの老人がありました。その人が或る時労働党の数人の党員にこんなことを話したそうです。

「諸君は何も知らないだろうが、君たちの党首の大山さんは、大震災の時に危く殺されかかたんだよ。陸軍の或る秘密本部の方針で、大山さんを、あのどさくさまぎれに暗殺することになり、憲兵隊が大山さんを自宅から落合の屯所へ引っぱったのだが、その引っぱり方が余り大げさだった為に、付近の民衆が騒ぎ出し、それをまた新聞社が嗅ぎつけ、四方八方へ電話をかけて大山さんの行方を探したのだから、憲兵隊でもとうとうおやまさんを殺すわけにはいかなくなってしまったのさ。大山さんという人は運のいい人さ!」と。

この話を聞いて党員たちは、その老人が何故そんなことを知っているのか、その話に疑問を持ち、直ぐにそれを質問すると、その老人は大声で笑いながら、「実はわしはそのときの憲兵隊の参謀だったのさ」と、自分の前身を正直に告白したということです。①

大正十二年の一月ドイツから帰国した村山は、柳瀬正夢らと前衛的な美術団体をマヴォを結成し、同年七月浅草公園の伝通院本木堂で第一回展覧会を開いた。大震災を利した官憲の弾圧は彼にも余波が及ぶ。

① 田部井健次著『大山郁夫』進路社、一九四七年。一一―一二、一四―一七、二六―二九頁。

大地震による取締りと復興への画業（村山知義著『演劇的自叙伝2』）

その年の九月一日の正午に関東地方の大震災があつた。あわてて庭へ跳び出したら、三角の屋根の一番突んがった所が下の部分と逆の方向へユラユラと揺れていた。揺り返しが多いので、内へは入れない、家は幸い少し壁が落ちた程度だ。そのうち下町の方が大火事だという噂がつたわり、望見すると東南の空が煙で黒くなっている。夕方になって、私は山の手の線路伝いに新宿の方へ歩いてみた。むろん電車は動いていない。新宿に近づくにつれて、下町からの避難民が疲れ切った顔で、延々として郊外へ郊外へと歩いて行く。これは大変なことになったと思つた。火事はますます拡がって、空は真紅になり、それがだんだんと、こちらの方へも押し寄せてくる。私は始めてこれは大変なことになったと、身体がガクガクしてきた・・・

四日目だったか、私の家のグリーンの扉をビューンと開けて七、八人の剣突鉄砲を構えた兵士が血相変えて現れた。私は例のルパシカ姿で、どうしたわけか、手にゴム毬を持って応対に出た・・・「お前は何だ？何をしているんだ？」などと問いかける。私があまりニコニコしているの、やがて去ってしまった。私はまだ社会主義者ではなく、従ってブラック・リストに載っていないが、近所の人、あの家は怪しい者が出入りする怪しい家だ、と告げ口したに違いない。

やがて、その日の早朝近所に住んでいた柳瀬正夢と平林たい子が、同じく銃剣を持った兵士に追い立てられて、戸塚署へつれて行かれた、という知らせがあつた。数日後柳瀬は放免されて、その時のことを語ってくれた。彼は私の家からちょっと小滝橋寄りの車屋の二階に間借りしていた。車屋というのは人力車を持つ

て、それを曳いて商売している車夫のことだ。その家の娘さんと恋愛して結婚することになるのだが、それは後の話。・・・

震災後の復旧が進むにつれて、マヴォにショーウィンドーの装飾や看板や建物の外装や壁面装飾や、ついには建築設計までも頼んでくるところが増えてきた。震災後の混乱した人心や、復興への意気込みやらを反映してのことだ。まず手始めが文房堂の筋向かいに本屋をやっていた、開成中学の同級生芳賀丈夫君の店の看板だった。私の描いたプランに従って、看板屋に形を造らせ、私たち自身でペンキを塗った。新橋、日本橋、神田等の目抜き場所にカフェ、食堂、文房具店などの珍奇な外装の建物がたくさんに出来た。私たちは、バウハウスの人たちがマグデブルグを町ぐるみ表現主義化したのにならう意気込みで、朝から梯子やペンキの缶をかついで走り回った。それはわれわれの糧道ともなった。

①

新劇の代表的な男優千田是也は、銀座服部時計店を設計した建築家伊藤為吉の六男である。早稲田大學の独文科に聴講生として在学中の大正十二年、千田は兄熹朔とともに人形芝居に熱中していた。動く人形で『セヴィリアの理髪師』などを演じるため、夏休み末に麻生材木町の小さな家を借り、模型舞台の装置を運び入れた。大部的な自叙伝で縷々語られるのは、大地震における市街への脱出と一家の対応である。朝鮮人騒ぎの余波を浴びた千田是也の受難、〈千駄ヶ谷のコリアン〉との誤認はよく知られる。

① 村山知義著『演劇的自叙伝2』東邦出版社、一九七一年。一七九、一八三、一八九、一九五頁。

大地震の襲来と朝鮮人騒ぎの受難（千田是也著『もうひとつの新劇史』）

そこへ越した翌日の午ちかく、熹朔はなにかの買物に出かけ、私と川村君とは鴨居にずらりとぶらさげた人形の糸の具合を調べていた。すると急に家が上下、左右にもものすごく揺れだし、例の大正十二年九月一日の関東大震災がやってきた。廂から瓦がガラガラ落ちてくるので、うっかり外へも出られず、二人とも縁側の柱につかまって、いつ崩れるかと天井をにらんでいた。

そのうちにだいぶ揺れが納まって来たようなので、ともかく近所の様子を見てこようと、あいかわらず悲劇的な顔をしながらプランプラン揺れている人形たちを袋に入れて押入れにしまい、細い路地をまっしぐらに走り抜けて材木町の大通りに出た。すると六本木のほうから熹朔が息せききってやって来て立ちどまりながら、「おれ、平河町へ行かなけりやないから、家のほうを頼むよ」というと、またスタコラ引きかえしていった。

よしきたと私は勇みたち、余震のたびに墓石がゴロゴロ倒れている青山墓地を駆けぬけ、白い雲だか煙だが、モクモクしている四谷から赤坂へかけての空をはずに見上げ、これはただごとではないぞとあわてながら、青山練兵場を千駄ヶ谷に抜け、やっと家にたどりついた。

さいわいこの辺は大した被害はなく、わが家も塀が倒れたり、瓦が落ちたりしただけで、みんな無事に裏の空地に避難していた。「熹朔はいいなにしてるのよ」と母はだいぶ不服そうだったが、私は熹朔のさっきの済まなそうな顔を思い浮かべて「だってあっちは彼女と女中だけだし、仕方ねえよ」と弁解した。

その晩から私はやたらに忙しくなった。おやじの二号さんや三号さんや近い親類の安否を尋ねてあちこちを駆けまわされたり、その途中で罹災者の大八車を後押しをしたり、主人にはぐれてウロウロしているどこかの婆やさんらしいのを、佐々木たつもこんなことになっているのかなあと、つい日本橋から宮城前までおぶって行ったり、見つかった親類の家へリヤカーで食料をはこばされたり、夜警に引っぱりだされたり―日頃は細工物や本にへばりついていて私でも、さてこういう事態のなかで駆けまわるのは、やはりうちでは一番うってつけの年齢だったわけであろう。

センダ・コレヤという私の芸名の由来であるあの事件が起きたのは、この大震災のたしか二日目である。個々の炎が夜空を真つ赤にそめ、ときどきガソリンや火薬の爆発する不気味な音がきこえ、余震がくりかえされ、通りには怪我人たちをのせた担架や荷車をかこむ疲れはてた人たちの行列がつづくあの状況の中できくと、朝鮮人が日頃のうらみで大挙して日本人を襲撃してくるとか、無政府主義者や共産主義者が井戸に劇薬を投げこんでいるとか、道ばたで避難民に毒饅頭をくばっているとかいう馬鹿馬鹿しいデマまでが、なんとなくほんとうに思えてくるらしい。おまけに鉄衛がそのころ近衛の聯隊長をしていた古荘のところへ見舞いにいって姉からきいてきた情報によれば、軍は多摩川べりに散開して、神奈川方面より大挙北上中の〈不逞鮮人集団〉と目下交戦中だという。

そこで私もじつとしていられなくなり二階の押入れにいられたあつた長持の底から先祖伝来の短刀を持ち出して、いつでも外から取れるように便所の掃き出し口の小窓のかげにかくすと、登山杖をもって、お向いの勝ちゃんの従兄の大学生といっしょに、家のまえの警備についた。

そのうちに夜も更け、便々と待っているのも気がきかぬような気かしはじめ、敵情偵察というわけで、千

駄ヶ谷の駅にちかい線路の土手にのぼっていくと、うしろのほうで「鮮人だ、鮮人だ!」という叫びがきこえた。ふりかえると、明治神宮の、当時はまだ原っぱだった外苑道路の闇の中をいくつもの提灯がちかづいてくるのが見えた。それをしてつきり〈不逞鮮人〉をこっちへ追って来るものと思ひこみ、はさみ撃ちにしてやろうと走って行くと、いきなり腰のあたりを後からガンとやられた。おどろいて向きなおると、雲くばかりの大男がステッキをふりかざして、「イタア、イタア!」と叫んでいる。

登山杖をかまえて後じさりしながら、「違う、違います!」といくら弁解しても、相手はいっかな聞きいれず、「センジンダア、センジンダア!」とステッキをふりまわしながら嗅ぎつづける。そのうち提灯たちが集まってきて、ぐるりと私をとり巻いた。みると、喚いている大男は千駄ヶ谷駅のまえに住む白糸ロシア人の羅紗売りだった。そっちは朝鮮人でないことは一目瞭然だが、こっちはそうはいかない。その証拠に棍棒だの木剣だの竹槍だの新割りだのをてんでに携えた、これまた朝鮮人だか日本人だか見分けのつけにくい連中が、「畜生、白状しろ」「ふてえ野郎だ、本籍を言え」「嘘をぬかすと、叩っころすぞ」と私をこづきまわすのである。

「いえ日本人です。ついこのさきに住んでいるイトウ・クニヤという、このとおり早稲田の学生です」と、学生証まで見せたがいっこう聞きいれず、薪割りや木剣を私の頭のうえに振りかざして「アイウエオ」を言ってみろの、「教育勅語」を暗誦しろのという。・・・ありがたや、だれかが後ろのほうから、「なあんだ、伊藤さんのお坊ちゃんじゃねえか。大丈夫だ、この人なら知っています」と言ってくれた。近所の酒屋の若い衆である。するともう一人、「そうだ、伊藤君だ」と、青年団の服を着た青年が前に出て来た。これは千駄ヶ谷教会の日曜学校に通っていた頃の友達だった。・・・

いま思えば、ナチスのユダヤ人狩りと同じように、あれは震災で焼け出され傷つき裸にされた大衆の支配層に対する不満や怒りを、民族的な敵対感情にすりかえようとした政府や軍部の謀略だったのであろう。

そんなエピソードをも含めて、あつとという間に東京の三分の二以上を焼け野原にしてしまったこの大地震は、私にいい薬になった。《救世軍の芝居》から『その妹』を経て、これが私の見た第三のリアルなドラマということになるわけだが、これはむしろ《救世軍の芝居》にちかく、だがもっとも大きく、もっとすさまじかった。言ってみれば、人間対人間のドラマもあり、人間対自然のドラマもあり、おまけにその両方がきびしく巨大で、芸術青年の私はすっかり圧倒された。①

同じく築地小劇場の男優、薄田研二は福岡の酒造家で生まれた。子どもの頃彼は郷土芸能《博多にわか》は熱中し、しばしば店先で黒板を背景に自演も披露する。富裕で芝居好きの父親が、評判の尾上松之助を招いて興行を支援し、宿として自宅を提供することもあった。やがて絵画の修行を始めた賢治は、入院を機縁に児島善三郎や倉田百三と知り合い、ついに大正九年倉田を慕って上京し牛込に下宿する。おりしも白樺派の文人たちが倉田の戯曲『俊寛』の上演を企画し、大森池上の料亭に設けられた舞台で彼は俊寛の役を演じた。②

① 千田是也著『もうひとつの新劇史―千田是也自伝』筑摩書房、一九七五年。五六―五八頁。

② 薄田研二著『暗転―わが演劇自伝』東峰書院、一九六〇年。二九―三七頁。

演劇への志望と自宅の震災（薄田研二著『暗転―わが演劇自伝』）

どうやら生活も落ち着いたころ、みやこ新聞の学芸記者をしていた上泉秀信さんから手紙がきて、村田実が地球座という劇団をつくって浅草で旗揚げ公演の準備をしている、行ってみたらどうかと、すすめてまいりました。白樺の人たち、武者小路先生、有島武郎先生、長与善郎先生なども、私のことについてはいろいろと心配して下さっており、またそういう関係で上泉さんも骨折ってくれているわけです。しかし私の内心は実はまだ絵のほうへ未練があつて、なかなか決心がつかずにいたのですが、妻の晴子も画家としてより俳優としてのほうが大成すると思う、と強くすすめることもあつて、やっと芝居に入る決心がつき、じゃあ行ってみようかと、と腰をあげた瞬間、ぐらぐらときました。大正十二（一九二三）年九月一日、死者九万一千名余、五二万戸の被害家屋を出した関東大震災の第一震です。

東京では地震直後一四五カ所から火災がおこり、水道管破壊のためほとんど消火が行なわれず、火は風をよび、風はまた火をよんで、下町一帯をなめつくしました。・・・この混乱のなかで、一時的におこった無政府状態を利用して、為政者みずから放った流言―不逞朝鮮人の暴動、社会主義者の蜂起―によって、ただでさえ冷静を失った民心に不安と動揺を与え、自警団を組織させ、朝鮮人と思えば撲殺し、軍隊、警察も内乱鎮圧の演習として直接手を下し、朝鮮人、社会主義者を犠牲にしたことは、永久に忘れることのできない恨事でした。・・・

さて私の家のはじめの一震でベチャンコになり、私は梁の下敷になってしまいました。しかし、何が幸いするかわかりません。若いころ病氣勝ちだった体をきたえるために、から手を稽古したことがありましたが、

針金を胸に撒いてブツリと切るぐらいのことは当時でもできましたが、そのから手の呼吸でどうにか危地を脱することはできました。しかし、東京は壊滅です。芝居や絵どころではなくなりました。家がつぶれたので行くところがない。倉田先生のお家は幸いつぶれずにすみましたから、あとのことを頼んでひとまず東京を引きあげることにしました。・・・

東京を離れるに際して私は倉田先生から、大阪におられる小山内薫先生に会って身の振り方を相談するようという紹介状を頂きました。当時小山内先生は大阪のプラトン社という出版社の編集顧問をしておられ、月に一度ずつ下阪することにしていて、家族連れで関西に来ていて震災を知り、大阪定住を決意しておられた。私は伊丹に腰を落ち着けるとさっそく大阪へ先生を訪ねましたが、先生の頼みとする有楽座、明治座、市村座など都心部の劇場はみな焼け亡び、東京の再起はむずかしいのではないかと悲観的で腰をあげる様子はみられませんでした。

私は仕方なく伊丹で再び絵をかきはじめました。地三の手を引き、つま子を乳母車にのせ、自分はカンパスと絵具、それに酒をつめた魔法ビンとをかついで、尻端折りをして毎日絵を描きに出かけましたが、煙草は両切では面倒なので、葉巻にしましたから、伊丹のような田舎ではたちまち名物おとこになってしまいました。^①

① 薄田研二著『暗転ーわが演劇自伝』四二―四五頁。

大正二年芸術座の創立に参加した沢田正二郎は、三年後帝劇でトルストイ作『アンナ・カレーニナ』に出演したのち離脱した。歌舞伎と新劇の中間を占める大衆演劇をめざして、倉橋仙太郎らと劇団新国劇を結成したのである。やがて明治座で供された中里介山作・沢村主演『大菩薩峠』が、連日札止めの大盛況となった。しかし、大正十二年の八月末本拠の浅草公園劇場において、車座で会食中の団員が官憲の立ち入りで賭博と誤認され、沢田を含む四六名が検束された。彼らが大地震の襲われるのは、丸の内なる警視庁の留置場である。^①

「大震災直面記」（沢田正二郎著『苦闘の跡』）

私は思いがけなく、しかも他動的に突発した事件のために、忌まわしい嫌疑をうけて、けれどもまた感謝したいほどの得難い体験をなめつつ、冷たい、暗い三日間の日を過ごしていた。・・・私たちは正しい裁きを受けるために、裁判所へ送られる分時を一刻千秋の思いでまつのであった。

丁度その時である。私たちの生涯において二度と味会わうことのできないような、大きな力が襲いかかって来たのは。一度！二度！踏みしめた大地までが、私たちをこの地上に真直ぐには立たせておかないのかと思わせるように震動した。九月一日の大地震！それは私たちの上に降りかかった突発事件が、本当に思いがけないことであつたように、人々にはまったく思いがけない大災厄だったにちがいない。

「死ねばもろともだ。狼狽ててはならぬぞ！」私は他の四六名の者にむかってこう叫んだ。気の毒な座員

① 新国劇編『新国劇五十年』中林出版、一九六七年。一八一―一九、四一―四二、四六―五四頁。

たちは私の体を庇うように取り囲むのである。神は我ら正しき者を守らせ給うたものか、幸いひとりの怪我人もなかった。数分の後にはその職に親切な人々に守られ、まず初め帝劇の横の広場に避難させられた。想えば、かつてはこの白亜の中で幾千の観客を前に、拍手に迎えられながら、ステージに立ったこともあるものを。哀れや今は、南側入口前のたたきのうえに蹲っていなければならぬとは。・・・

家族安かれ、私の劇を愛してくれる人々安かれと念じ祈りつつ、私たちはまだそこに蹲っている。火の手がだんだん掩いかぶさって来た。彼方此方で「熱ッ熱ッ」という声が聞える。危険と見てか、係の警官は私たちを宮城前の広ツ場に連れて行ってくれた。・・・

あの火は大蔵省だ。その向こうは神田だ。こちらのは芝だ。あれが京橋だ。―その火煙の囲みのなかに、帝劇の焼けているのが、花のしべのように美しく見える。学生時代に三等切符を買いながら眺めていたあの屋上の翁の像が、今で善美を誇っていた帝劇の運命を負っているかの如くに、見ている間に倒れ落ちてしまった。開館式に呼ばれて行ったあの宏壮な建物、友が結婚の披露をしたあの東京會館の銅骨が、うつろのうに挟られているのが悲惨さを物語っている。・・・

やがて私はこの職を司どる上の人に呼び出された。一同の顔にはある輝きの色が漲った。しかしそれは事実となってあらわれた。もとより白日の身の、国法に正しき限り自分たちの行為に罪なきを信じていた私たちは、進んで法の裁きを受けることを希望していたのであるから、命じられずとも「明日午後五時までにふたたび集まって出頭しましょう」と約して、一同兎に角放還されることになった。それはもう四時に近いころだった。情知る人々の見送りを受けながら、丸の内から一步を外に踏み出してみて、初めて私は世の中のただならぬ様に驚愕した。人は火から逃れんとしてすべての財物を捨てて逃げていく。なんとという悲惨の

様であろう。・・・忠臣蔵にでもあるように、四七名の座員は「天」「下」の合言葉を便りに隊列を作り、車に重い荷を積んで苦しんでいる人を見ては、それを後押ししてやったり、道端に倒れている力弱い婦女子のあるのを見ては、これをいたわり救いながら、ひた走りに走って本石町の角まで来た時、私はさらに二度めの大きな驚きを感じた。「世界の絶滅とはこのことか」こんどは私からこう叫びたいような気がした。

烈風に煽られた猛火はさながら私たちを襲うて来るかのようなのである。裏の細道を駈ける人、も一度震れたらきつと崩れ落ちるに達しない危険な屋根、しかも焰に吹きつけられて燃えしきっているその軒下を走っていく人、そうしたガードをぐぐくいり抜け、喉が乾けば消防のホースにかじりついて泥水で口をいやしたり、路傍に落ちころがっている角砂糖を見つけてかじったりしながら、またひた走りに須田町の方へ走っていった。・・・

異様に赤黒く焦げた、未だに忘れることの出来ない天のそらよ！この恐ろしい姿の幕は、はや夜のとばりに覆われんとしている。あらゆる電光は滅しても、燃え広がる火光によって、路面は昼のような明るさである。道々座員の家を訪おうとはしてみるけれど、どこもここもすでに猛火の中に包まれてしまつて手の施しようもあればこそ。その紅い火の光りに照らされた顔一つ、それは私の家の安否を私に知らしむべく、すぐ警視庁まで駆けつけてくれて果さず、いま雷門まで引き返してきたという文芸部の依藤君であった。この混乱の巷に於て奇しくも依藤君に巡り遭うことの出来た不思議さよ。・・・三日間ついに逢うこと出来なかった公園劇場関係者たちの無事な顔をも見ることが出来た。そして、近隣の人々の温かい恵みの握飯に餓えをしのいで、しばし休らう暇もなく、火はいまここを襲わんとする勢いである。・・・

私は真暗い公園劇場の楽屋から座布団のごときものを少しずつ持ち出させ、新国劇の提灯を列の前後に押

し立て、燃え盛る火の手を側面に見ながら、二時間前に歩いた電車通を上野の山へ向かったのである。ようやく上野台に辿りついて振りかえれば、まず胸をつまらせるものは、下町一帯の火焰である。①

芝居街浅草猿若町は水野忠邦による天保の改革に起源を有する。町人の暮らしを取り締まり、奢侈・遊興を禁じる水野は、城下より離れた浅草にのみ、芝居小屋の建設を許した。そのため浅草寺北方が猿若町と改称され、市村座、中村座、河原崎座の三座が鼎立して、芝居茶屋が並び芝居関係者もここに移住する。以後「猿若町にのみ演劇の隆盛を誇るに至」り、「劇道の発達とともに江戸の好事をここに蒐め、為に櫓簀え旗幟翻るに至」った。市村座では幕末に河竹黙阿弥の『三人吉三』が初演され、大正に入るや五代目尾上菊五郎と初代中村吉右衛門による黄金の菊吉時代を呼び寄せた。②

明治十九年浅草公園において瓢箪池の開削がなされ、四年後には千束町に十二階建ての凌雲閣が完成した。これを中心として周囲の浅草六区には興行街が発達し、浅草寺詣でや吉原通いの途上にも寄る盛り場ともなる。島村抱月による芸術座の消滅、さらには小山内薫による自由劇場の活動停止によって帝国劇場が不振に陥ったため、伊庭孝や石井漠など丸の内新劇の落武者は、六区の日本館、金竜館、観音劇場に活路を求めた。大衆的な浅草で

① 「大震災直面記」(沢田正二郎著『苦闘の跡』柳蛙書房、一九二八年。一五〇―一五八頁。

② 新実武編『浅草猿若町』新実商店、一九七三年。四七―五〇、八九―九〇、一〇三頁。

は音楽と舞踊が主体であって、新劇はオペラに挟まれてわずかに上演される。① こうして大正六年頃から浅草オペラは最盛期を迎え、日本館における東京歌劇団の『天国と地獄』や金竜館における根岸大歌劇団の『釈迦』が人気を集めた。しかし、関東大震災は猿若町の芝居小屋をすべて焼き尽すとともに、六区の興行街をも焦土と一変させた。

大震災火災と浅草興行街 (内山惣十郎著『浅草オペラの生活』)

九月一日午前十一時五八分。突如として襲った関東大震災に、歓楽街浅草公園は一瞬にして猛火に襲われ、生地獄となった。金竜館の舞台ではその時佐々紅華作のお伽歌劇『カチカチ山』を、杉寛のタヌキ、高井ルビのウサギで熱演の真最中、天地が崩れるばかりの大動揺に、木造作りの楽屋は大波のように揺れ、道をへだてた公園劇場とハチ合せをせんばかりの凄まじさに、女優連中は悲鳴をあげて、狭い階段を転がるように表へ飛び出した。

六区は各館から溢れ出た観客が、猛火と煙の中を逃げまどい、杉寛はタヌキの縫いぐるみを着たままで、群衆を押し分け掻き分け、無我夢中で瓢箪池の中の島までやっとたどりついた時、一大音響を立てて十二階が真ん中から折れて崩れ落ちた。歌劇の殿堂金竜館も日本館も、いや浅草公園は観音堂が奇蹟に残っただけで、あたり一面荒涼たる焦土と化してしまった。

① 松本克平著『日本新劇史―新劇貧乏物語』筑摩書房、一九六六年。三二五―三二七頁。

本城を失った歌劇人は、再建の日までと、東京を後に地方巡業に出たものの、楽譜は焼け衣装は焼け、満足な興行は出来なかった。それでもふたたび六区復興の日、オペラ再興の日を夢見て、北に南に旅巡りを続けて露命をつないだが、さて復興の浅草は、地方から入りこんだ大工、左官の職人たちの天下で、オペラファン、の学生、サラリーマンは姿を消し、観客層はガラリと変っていた。

翌十三年四月浅草劇場にオペラ残党の役者をかき集めて森歌劇団を結成。だが、スリルとスピードとエロチシズムをもつ剣劇と安木節が六区興行街を風靡し、さしも全盛を誇った浅草オペラは、ついに再びその華やかな幕を開くことなく、関東大震災と共にフィナーレとなってしまったのである。①

劇作家長田秀彦の実弟長田幹彦は、旅廻り一座の経験を有し、長編『旅役者』の著者である。みずからの体験に基づく彼の記録『大地は震ふ』では、都心丸の内の壊滅や本所被服廠跡の地獄絵が描写されるとともに、末尾に組まれた長文の聴き書きとして、弱小劇団の凄惨な被災も世に伝えられる。

「楽屋から」（長田幹彦著『大地は震う』）

あの日は丁度私共の座は二回興行ですから、地震の当時は生憎と幕が開いていたんです。十時に開けて、一番目の序幕がすむと引き返しが二幕目になるんです。出しものは『真田軍記』という古いものをかけてい

① 内山惣十郎著『浅草オペラの生活』雄山閣出版、一九六七年。一一九―一二〇頁。

ましたんです。なにしろ役者の頭株が桔十郎というんですから、まあ芝居としちゃお話になりませんし、それにあの日はあのお天気で御座んしょう。ですから入りも薄くて、前の椅子席へあれでも五、六十ばらりと来ていた位なものでしたから、幸いにしてお客様のなかには、死んだ方は四、五人しきやなかったんです。

私はあの時にや師匠が丁度出帰りで床へ上って来ましたので、お囃しの部屋へ入り込んで、例の取り愚にもつかねえヨタを飛ばいてきやきや笑っていだんで御座んすよ。そこへ丁度弁当屋がやって来ましたんで、師匠の鰻どんを一つと三味線の佐幸の中弁を一つ言いつけていますと、そこへどしんと最初のどえらい奴がやって来たんです。私は部屋の入口の柱へ身体を寄せかけていましたんで、どしんと突き上げられると一緒に、だしぬけに廊下の方へおっぼり出されてしましましてねえ、何がなんだかまるで自分じゃ分らねえうちに、もう舞台の屋根はもろにどかりと落ちて来てしまったんです。私がぼっかり眼を開いたときにや、ひどい土煙りの中に、明るいう外の光がきらきらさし込んで来て、まるで夢のような気がしました。・・・

起きてみますと驚きましたねえ。なにしろ小さな劇場じゃありますが、天井の屋根が斜めに落ちてしまっているんで、まるで横様にひっくり帰ったのも同じことなんです。トタンのめくれたところからは、日の光がかんかん射し込んで、簀の子の中の雑物が減茶めちゃんにはみ出ています。それに土煙りが黄色くあがっているんで、そこいらは何がなんだか訳が分からなくなっているんです。さうして揺り返しが来る度に、壊れかかった屋根がぶるぶる身震いをして、横木や丸太が恐ろしい音を立てて、どかりと落ちてくるんです。

その時、舞台の方ではなんとも云えない物凄い人の声がしていました。こう唸るような泣いているような、それこそなんとも云いようのない恐ろしい声なんです。作さんはそれを聞くと、「おい、昇公、大変だ。あの下にやきつと親方や、花駒さんがしかれているに相違ねえ。丁度舞台だったから、きつとやられているよ。

こまったなあ。誰か来て暮れるといいが、」と云います。もうその時分には道具方の方の奴等は片端から逃げてしまつて、だれひとりいないんです・・・

書き割りの倒れた上へ、また棟木が落ちていゝるんで、私はその間を彼方へくぐりぬけ、此方へくぐりぬけて、やつとのことで上手の電気室のところまで入りました。もう無我夢中ですから、どうして入つてか、今でも覚えちゃいないんです。私はやつとのことで床の柱をみつけましたんで、そこから大きな声で、「師匠、師匠」と呼んでみました。と、案外にもすぐ足の下で師匠の声がして、「おう、昇公か。よく来て呉れた。どうか助けて呉れ。俺あもう苦しくつて」と息もきれぎれに云います。

私は師匠が生きていて呉れたのが嬉しくて、「あ、師匠。無事でいらして、ほんとによろこびました。いま私がこの板を破しますから」と云つて、私は半分壊れかかつている板壁をめりめり両手で引き壊しました・・・師匠は気が遠くなつていゝのか、もう呆けたような声で、「おい、昇公。俺あお右の足が梁の間へ挟まつていゝるんで、身動きが出来ねえんだ。早くお前、そこを開けて、この材木を退けて呉れ」と云います・・・

そこへ戸外の方で、清さんの声が、「おうい、おうい、昇さん。楽屋口の方から火が廻つたから、早く逃げろ。おい、昇さん」と喚めいていゝのが、遠くで聞こえていゝるんです。私ははッとして顔を上げると、なるほど向うではものはぜるような気味の悪い音がばち聞えて、何処からともなくむせつぱい煙がむんむとするほど入つて来るんです。私はもう途方にくれてしまいました。人手さえあれば、どうにかして助けることも出来るのにと思ひますと、もう私も氣狂ひのようになりそうで、「師匠、大丈夫です。しっかりなさい。いま私がこの木を向うへ動かしますから」と云ひ云ひ、もう死にも狂いでその棟木を向うへ

押しやろうとしました。しかしその木は一寸ほどがくがくするだけで、びくともしなんです。

師匠も火がかつたことを感づいたとみえまして「おい、昇公、いやに煙つてえじゃねえか。火事じゃねえのか。火事なら大変だ。さ、早く、早く、出して呉れ」と云つて、自分でも一生懸命になつてもがいていゝる様子なんです。私はいくらやつても駄目なほどほと困つてしまつたんです。そのうちにも火は容赦もなく燃え上つて、板と板の隙間がぼうつと明るくなつて来たかと思つと、煙が眼もあいていゝられない位に吹き込んで来ます。

もう私は万事休すと思ひまして「ねえ、師匠。しっかりして下さい。私やいけなけりや、このまま師匠と一緒にここで死にますから」と、泣き出してしまひましたが、師匠はあの氣丈な人ですから、叱るように「おい、昇公。冗談言ふな。お前が死んだつて、何の役にも立たねえんだ。それより早く大道具のところへいつて、鋸を捜して来い。そうして鋸で俺のこの左の足を挽いてくれ。俺あ喉で飯を食つていゝる芸人だ。喉さえ助かりや、あとはどうなつて構わねえんだ。さ、早く鋸をもつて来い」と、もう半狂乱で云つてゐるんです・・・私はもううろろろするばかりで、仕方がありませんから、兎に角そこを出て鋸を捜しにいきました。

私は悔しうござんすが、もうそれっきり二度ともとのところへ帰れなかつたんでござんすよ。やつと裏梯子のところまでくると、もう一面の火で、とても熱くていゝられません。見ると、火は書割を這つて、もう屋根の下はずつと火になつて、めらめら燃え上つていゝます。舞台の方では人の呻く声が聞えたようでしたが、もうそれも私の耳には入りませんでした・・・

それからもう火に追われて、何処をどう逃げるかまるで分りません。ただ芝居の裏の塀のところに、下廻りの役者達が布子の勢子の着つけを着たまま三人ほど死んで倒れていたのが眼に残つていゝるばかりで、何

もかも一切無我夢中だったんです。やっとこのやまへ上って、生命が助かったのを知ったのは、二日の暁方でした。

師匠も親方もとうとうあのまま焼け死んでしまったんです。私やそれを思うと、今でも体がぞくぞくして、どうせいけないと知りながら、済まねえような気がしてならねえんです。あの時師匠が何んてつても構わずに、あすこについていて、一緒に死にや私は本望だったんです。ゆうべなんかも私や師匠の夢をみましたて、ふと眼を覚ますと、あの方衣が眼先へちらつく、あの声が耳に聞えて、夜っぴてまんじりともしませんでした。ああ、考え出しても私や全く死にたくなりますよ。①

① 長田幹彦著『大地は震ふ』二七六―二八〇、二八四―二九二頁。